

ライオンに好かれた話

ライオンに好かれた話

上野動物園に行った。母は生まれたばかりの弟と家にいたので、父とふたりだった。

あちらこちらと動物を見て回ったはずだが、それはほとんど記憶がない。

するうち、ライオンの檻へ行き着いた。前はさすがの人だからである。小さい私は下から人垣をくぐり抜けて、網の前に立った。

雄の一頭が近づいてきて、ちょうど私の前で立ち止まった。とても立派な顔つきをしていて、はじめて本物のライオンを見た私は、その見事なたてがみや、堂々と太い鼻柱に感嘆して見入っていた。

ライオンは晴れやかな顔をしている。機嫌の良さそうなの、と言ってもいい。すてきなあと思っ眺めている私の気持ち伝わったみたいだ。しばらくそうやって向かい合っていた。

と、隣にいた父が私に「向こうへ行ってみてごらん」と言った。

何のことか分からないが、言われたとおり、人垣

ライオンに好かれた話

の後ろを通って五メートルほど移動した。

すると、ライオンも私の後を追うように、網にそって歩いてくるではないか。そして私が立ち止まった場所の前まで来ると歩みを止め、私のほうを向いた。思いなしか、人なつこい顔をしている。

それを見て檻の前の人だけが「おおーっ！」と、静かな声を上げた。私も何やらとてもうれしい気持ちになった。

父がまた「こっちにおいで」と私を招く。

言われたとおり、私は先ほどと反対方向に歩いて、また立ち止まった。私が歩き始めると、ライオンもそれにつれて歩き始め、私が止まったところで止まる。そして私の顔を見る。ライオンは満足そうだ。



私もとても満足である。何とというか、気持ちを通じているなあ、そんな感じだ。

うれしい気もするし、でもまだ信じられない気もして、またあっちへ行ったり、こっちへ戻ったり、二、三度くりかえした。ライオンはやっぱり私についてくる。なぜだか分からないが、このライオンは私が気に入ったらしい。そう思った。

とはいえ相手はライオンである。しかも檻の中。話しかけることもできないし、まして手を伸ばしてたてがみを撫でてやることもできない。何とというか、なすすべがないという感じで、しばしの後、父と私はそこを立ち去った。一部始終をみんなが見ていた

ライオンに好かれた話

後だから、ちよっと気恥ずかしい気分だったのではないかと思う。

それからずっとライオンが好きだ。

私のなかにあるライオンは笑っている。犬は飼い主に向かって笑いかけるものだが、私のなかのライオンもそんなふうに笑っている。

以来、機会があると熱心にライオンを見るのだけれど、あの時のライオンのように姿もたてがみも美しい雄ライオンは見たことがない。まして私に笑いかけるライオンはいなかった。

これまで見たなかで、よしよしと思うのは日本橋の三越のライオンと、ロンドンのトラファルガー広

場のライオンだが、どちらも冷たい銅像。それに、あまりに壮麗で、鼻筋が通り過ぎていて、近寄りたくない。何より私のあのライオンのように私を見ていない。眼が輝いていない。

(初出 ホームページ「佐々木涼子の部屋」二〇一六年四月)